

おとぎ話は終わらない2

レヴィ

ギルフォードの弟。

ギルフォード

北の大国セレスティアの
王族。

アイル

ギルフォードの部下。

シャノン

『楽園』の上級生。
ヴィクトリアの
後見を申し出た
ラング侯爵家
のお坊ちゃま。

リーゼス

『楽園』の最上級生で寮長。
ヴィクトリアの性別を知り
彼女を支えてくれる
ようになる。

ヨシュア

ラング侯爵家の先代当主。
ヴィクトリアの母親の形見から
彼女の出生の秘密に気がつく。

ランディ

ヴィクトリアの元クラスメート。
彼女が作った
黒猫の魔導具を愛でる、
大の可愛いもの好き。

ヴィクトリア

天涯孤独で後ろ盾のない
平民の少女。学費、生活費タダに
つられ、男の子の格好で
魔術学校『楽園』に入学した。
しかし、ヨシュアに性別がバレて
退学させられてしまい……

男装したヴィクトリア

**登場人物
紹介**

目次

おとぎ話は終わらない2	7
おとぎ話の、そのあとで	277

おとぎ話は終わらない 2

すつきりと晴れ渡った秋空に、明るい茶色の煉瓦で造られた『楽園』の学舎がよく映えている。ほんの少し前までは、彼女——ヴィクトリア・コーザもここに集う生徒の一員で、毎日見ている校舎。にもかかわらず、なんだかまるで見知らぬ場所のように感じる。不思議なものだ。

それは学内のあちこちに、祭りらしい華やかな飾りが施されているせいだろうか。あるいは、普段は若い男子生徒しかいない場所に、老若男女——おそらく生徒の家族が、大勢訪れているせいだろうか。

いつもとは比べものにならないほど人がいるが、広大な敷地を持つ『楽園』に窮屈感はない。

(そういえば、はじめて見たときにはあんまり立派な学校で、びつくりしたな！)

ヴィクトリアがこの国立魔導具研究開発局附属の全寮制魔術専門学校——通称『楽園』に入学したのは、今年の春のこと。

南の田舎町で生まれ育った彼女は、母を亡くして天涯孤独の身になった。そのため、仕事を求めてこの皇都にやってきたのである。そして、『学費・食費・宿代すべてタダ』で通える魔術学校があると耳にした。そこは男子生徒しかいない学校らしく、彼女は少年に見えると太鼓判を押された

ショートカットに伊達眼鏡の姿で、『楽園』にもぐりこんだ。

今思えば、かなり無鉄砲な行動だった。しかし、なんのコネもなく頼る人もいない身の上では、それ以上にいい選択などなかったのだ。

入学してわかった『楽園』の実態は、皇国軍士官候補育成機関。その授業と訓練は、ヴィクトリアの想像を遙かに超えるものだった。

ヴィクトリアは魔導具に関する基礎知識を、田舎町で小さな家庭用生活魔導具店を営んでいた母から学んでいた。そのため、座学に関してはさほど苦労しなくて済んだ。

しかし、生まれてこのかた、ど突き合いの喧嘩などしたことはない。彼女は厳しすぎる体術の授業で、死ぬ思いをしたものだ。わがまま放題な皇太子殿下の暗殺未遂事件に巻きこまれたり、武術大会で対戦した脳筋の先輩、オリヴィアに容赦なく叩きのめされたり、大変なこともあった。

そんなことさえ懐かしく思い出せるのは、『楽園』で過ごす間に出会った人々のおかげだろう。

その筆頭が、この生徒たちを束ねる寮長のリージェス・メイア。彼は、ヴィクトリアが実は少女だとわかってから、ずっと陰ひなたになって助けてくれている。

彼の幼馴染みで親友のシャノン・ラングも、ヴィクトリアの味方のひとり。シスコンでちよっぴりメルヘンな思考回路の持ち主で、そこが少々残念ではあるが、とても愉快な青年だ。

はじめての友達ランディ・シンとは、『可愛いもの好き』として気が合った。彼は、ヴィクトリアが女の子だと知ってからも、以前と変わらない態度で接してくれる。

ヴィクトリアはできることならきちんと『楽園』を卒業して、いずれは故郷で母のように生活魔

導具店を営みたかった。しかし、シャノン^{いしやんのん}の祖父で、かつてこの皇国の英雄と呼ばれていたヨシユア・ラングとの出会いが、ヴィクトリアの人生を大きく変えてしまった。

彼いわく、ヴィクトリアの持っていた母の形見は、このギネヴィア皇国の先代皇帝第一皇女シャーロット・ローズ・ラナ・ギネヴィアのものだとか。その上、ヴィクトリアの顔立ちは、シャーロット皇女殿下に瓜二つなのだという。

シャーロット皇女殿下は、二十年前の戦^{いくさ}の最中^{さなか}に行方不明となった。

おまけにヴィクトリアの髪色は、父親譲りの銀^{ゆかり}。髪色に銀が現れるのは、その戦争の敵であった北の大国セレスティアの人間の特徴らしい。

母が皇女殿下だったなら、どうして皇都から遠く離れた田舎町^{いなか}で細々と暮らしていたのか。ヴィクトリアの亡き父と、どういう経緯で結ばれたのか。疑問は尽きないが、亡き母『ロッティ・コーザ』が本場に『シャーロット皇女殿下』であったのかについては、現在ヨシユアが調査中である。

ヴィクトリアは彼に自分の性別を明かした途端、『楽園』からの退学を命じられた。そして、ランダ家の屋敷で世話になることになったのだ。

あまりに想定外すぎる状況の変化に、ヴィクトリアはちよっぴりノイローゼになりかけてしまった。しかしリージェスの励ましで、どうにか立ち直れた。

そして今日、ヴィクトリアがランディに誘われてやってきたのは、『楽園』の学祭である。

（おお……すごい。あの着ぐるみの完成度は、もはや職人の域に達していると思います）

馬車で『楽園』の門前に降り立った瞬間、動物の着ぐるみたちの姿がヴィクトリアの目を引いた。

おそろく、上級生たちが作った魔導具で、中に生徒が入っているのだろう。

巨大でいかにも重そうな見た目だが、子どもたちに愛嬌^{あいきょう}を振りまいている姿は、実にコミカルかつ機敏である。外見だけでなく、使用者の運動補助性能にもかなりこだわっているようだ。

（……いや、あの動きは性能効果じゃなく、中身がただの脳筋である可能性も——と思ったら！）

三体揃って肩を組み、楽しみにライندگانを踊っていた着ぐるみが、跳んだ。それはもう、その場にいた人々がみんな天を仰ぐほどの高さまで。子どもたちは大きな歓声を上げた。

そして着ぐるみたちは、同時に空中できれいに一回転。見事に呼吸を揃えて着地すると、やけにスタイリッシュなポーズをびしっとキメる。

——拍手喝采^{はくしゅかつさい}。

もちろんヴィクトリアも、彼らに惜しめない拍手を送った。

こんなふうに見知らぬ人々とも一体感を味わえるのが、お祭りの一番素敵どころだと思う。

そのとき、背後からやんわりと声をかけられた。

「リアさま。もうじき、リージェスさまとお約束したお時間ですよ」

ヴィクトリアは、ぴよっと跳び上がる。

「も、申し訳ありません、モーガンさま！」

着ぐるみたちの見事なパフォーマンスに見とれて、時間を忘れてしまっていた。

今日、ヴィクトリアを『楽園』まで連れてきてくれたのは、この背が高い壮年の男性。夏の休暇中にメリア家の別荘で散々お世話になった、執事のモーガンである。

——ヴィクトリアがラングの屋敷の外へ出る際には、ヨシユアの命で必ず護衛を兼ねた付き添いがつけられる。

しかし、よく知らない相手と気詰まりな時間を過ごすのは、かなり遠慮したいものだった。何しろ、ラング家の護衛はきつちりと訓練されているらしく、仕事中はものすごく寡黙なのだ。ヴィクトリアが話しかけてみても、『プロというのは、護衛中に余計なおしゃべりなどしないのです』といわんばかりに、必要最低限のことしか答えてくれない。

そんな中で、ラング家の令嬢ミュリエル付きの若い女性だけは、めげずに話しかけ続けたためか、最近少しずつ話をしてくれるようになってきた。できればヴィクトリアは、彼女に学祭に付き添ってもらいたかった。

だが、季節の変わり目のせいか、ミュリエルはこのところ体調を崩して臥せりがちだ。

そんな彼女に、『ちょっと楽しいお祭りに遊びにいきたいので、アナタの付き添いの女性と一緒に来ていただきたいのです』なんて言えるはずもない。

——『楽園』の学祭にはぜひとも行きたい。でもラング家の厳めしい付き添いと一緒なのは、なんだかいやだ。

そう思ったヴィクトリアは、現在ラング家で一番発言権のありそうなシャノンにおうかがいを立ててみた。『ひとりで『楽園』のお祭りに行つてはダメですか？』と。

その返事はこちらん、『却下』。

しかしシャノンは、ヴィクトリアがラング家の護衛との行動に気詰まりを感じていることを察し

てくれたらしい。彼はすぐにリージェスに掛け合つて、ナイスミドルなモーガンに付き添いをしてもらえるよう、手配してくれたのだ。

ヴィクトリアは、シャノンとリージェスに心から感謝した。

シャノンへのお礼として、今度新しい魔導石ができたらミュリエル用の白い仔猫の魔導具を作つてプレゼントしようと思う。シスコンの彼にとつて、きっとミュリエルの笑顔が一番の喜びだろう。

ただ、問題なのは——

(リージェスさまへのお礼となると、もう何を渡したらいいのかさっぱりです！)

——リージェスの喜びのツボは、完全に謎だった。

ヴィクトリアなりに懸命に頭を捻つてみたのだが、何しろ相手は皇国軍の双璧のひとつである裕福な伯爵家の跡取り息子。

自分に用意できる魔導石では、シャノンの魔導石で作ったような高性能の魔導具は、とてもじゃないが作るなどできない。所持している小金で購入できるものだって、たかが知れている。

痛くなるほど頭をぐるぐるんと使つて悩みまくり、ヴィクトリアは結局、リージェスの親友と素敵な執事に相談してみることにした。学祭の数日前、ミュリエルの見舞いのために帰宅したシャノンと、ちょうどそのとき挨拶にきていたモーガンに。

リージェスの好みをこの世で最も理解しているはずのふたりだ。きつといいアドバイスをくれると思つたのである。

しかし、彼らから返つてきたのは、なぜか非常に生温かいほほえみだった。

『あー……。おまえからもらえるモンなら、なんでも大喜びするんじゃないの？ つーかもう、おまえらめんどくせーから、ほっぺにちゅーのひとつでもかましてこい！ オレが許す！』

モーガンは、そつと目頭めかしこを押さえた。

『シャノンさま……。すつかり大人になられて……』

『うん。青春の一ページがどどめ色に塗りつぶされた挙げ句、オレがひとり寂しく大人の階段を上つたのが誰のおかげかは、とりあえずツツコまないでおこな。モーガン』

そのときのシャノンの笑顔は目がまるで笑っていないくて、ちよつと怖かった。

何か、いやなことでもあったのだろうか。

それにしても、とヴィクトリアは首を捻ひねった。故郷では、キスは家族やよほど親しい間柄でなければいけないもの。だが、皇都では感謝の気持ちを伝える行為に当たらしい。

こんなことで、田舎いなかと皇都の文化の違いを感じるとは思わなかった。

ヴィクトリアがそう口にする、ふたりはなぜかひどく青ざめ、慌てたように言った。

『ままた待って待って！ そうじゃないからな!? おまえ、誰彼かまわずありがとうのちゅーとかしはじめるんじゃないぞ!』

『リアさま……。ミュリエルさまがシャノンさまに感謝のキスをされるのは、おふたりが仲のよい兄妹であるため。妙齢の女性が、軽々しく男性にキスをしたりするものではございません』

ふたりの言葉に、ヴィクトリアは『そうなのですか』とうなずいた。

シャノンは『感謝の気持ちを伝えるために、リージェスのほっぺにちゅーをしろ』と言った。そ

して、感謝のキスはミュリエルとシャノンのように仲よしの兄妹の間で交わされるものだという。

ならば、リージェスは自分を妹のように思ってくれているのだろうか、とつぶやいたとき――

ヴィクトリアは久しぶりに、がっしとシャノンに頭を鷲掴わしつかみにされた。ちよつと痛かった。

『……うん。悪かった。オレが悪かったから、過去三分間の会話はすべて忘れる。リージェスはおまえを妹扱いしているわけじゃねえし、何か礼をしてほしいと思ってるわけでもねえ。ふつーに！ にっこり笑って、ありがとうつて言つとけ。な?』

『申し訳ございません、シャノンさま。私としたことが……危あぶうく、リアさまに誤解をさせてしまうところでした。このモーガン、一生の不覚にございます』

なぜか蒼白そうはくになったモーガンに、シャノンはふつと遠いどこかを見ながら言った。

『気にするな。どんなことにも、想定外だとか勘違いだとか、見当違いとかいうのはあるもんだ』

『シャノンさま……。本当に、大人になられて……』

ヴィクトリアはそのやりとりを聞いて、ふたりはとつても仲よしさんなのだ、と思った。

そんなわけで結局、ヴィクトリアはリージェスに感謝の品を用意できなかった。手元不如意ふたふたなのは、もう仕方がない。出世払いということと勘弁してもらおう。

そう自分を納得させて、ありがたくモーガンに付き添っていただくことにした。

次の問題は、リージェスの隣を歩くための装いである。

ヴィクトリアの衣服は今、すべてラング家から提供されている。それらはどれも上流階級仕様できらきらしていて、着こなし方がいまだによくわからない。

途方に暮れたヴィクトリアがモーガンに相談すると、彼はにつこり笑い、即座に部下のメイドさんたちを呼び寄せた。

優秀なメイドさんたちが選んでくれたのは、淡いラベンダー色のドレス。そしてそれに合わせた手袋や靴、コートに至るまで、ばっちりコーディネートしてくれたのだ。

今日の支度では、ふんわりと毛先をカールさせたカツラを可愛らしい形に結び上げ、顔にはほんのりと薄化粧を施してくれた。そして、きれいに化粧した自分の姿を鏡の前で確認したヴィクトリアは、これは立派な詐欺師を名乗れるかもしれないな、と思った。

メイドさんたちは揃って、『せひ、リージェスさまのご感想を聞いてきてくださいね!』と言っていた。

内心ぐつと親指を立てながら、ヴィクトリアはうなずいた。ここまできっちり化けていけば、リージェスはきつと『詐欺だ』と言ってくれるだろう。

ここに至るまでのあれこれを思い出しながら、ヴィクトリアはモーガンと『楽園』中央校舎前の広場へ向かう。そこで、祭りを案内すると約束してくれたリージェスと待ち合せているのだ。

途中、あちこちに設営された屋台に目を向ける。愉快な扮装をした生徒たちが客の呼びこみ中だ。「——リアさま」

「はい?」

生徒たちの姿を興味深く眺めていると、穏やかな声でモーガンに呼びかけられた。ヴィクトリアは、ぱつと笑みを浮かべて顔を上げる。

「『楽園』を退学されたのは、リアさまにはさぞ残念なことだったでしょうが……。正直なところを申し上げれば、私どもは、ほつといたしましたよ」

「ええと……。どうしてですか?」

ヴィクトリアが首を捻ると、モーガンは苦笑した。

「リアさまはご存じなかったかもしれませんが、『楽園』では二年生になると、野外戦闘訓練実習というものがございます」

「……野外戦闘訓練実習?」

名前を聞いただけで、ものすごくいやな感じがする。

「リージェスさまから、以前うかがいました。それは五人一組でチームを組み、携帯食料と最低限の装備——といっても、おそらくかなりの重量になることでしょう。それらを背負って、森の奥深くに入る実習だそうです。その森には『楽園』の教師陣が山ほどトラップを仕掛けているのだから、そこからできる限り多くのチームを倒して相手の持つポイントを奪いつつ、二週間以内に脱出するというとても過酷なものだったそうです」

それを聞いてヴィクトリアは青ざめた。モーガンが厳かにうなずく。

「ヨシユアさまは、そういった『楽園』の過酷さをよくご存じでいらっしやいますから。リアさまのことを知られて、さぞ狼狽されたのだと思います。武術大会では、ひどいおけがもされたようです……。多少強引なところはありかもしれませんが、あの方はそうそう理不尽なことをなさる方ではございませんよ」

ヴィクトリアは、つくづく自分は『楽園』を甘く見ていたのだな、と改めて痛感した。そして、潔くこの場所への未練を断ち切ることにする。

幸い、ヴィクトリアの魔導具作りのスキルは、周囲の人々もきちんと評価してくれている。やっぱり自分はシャーロット皇女殿下の子どもでもありませんでした、という話になったとしても、心配はない。自分がものを言うこの国でヴィクトリアが魔術師になれるように、成年後は、リージェスが後ろ盾になってくれるらしい。彼女がきちんと食べていける力をつけるまで、きつと援助してくれるだろう。

……そう考えると、現在ラング家で受けている将来役に立つかがどうかまいったく不明なレディ教育は、やはり不要に思える。それよりも、確実な生活力に繋がる魔導具に関する知識を、もつと身につけた方がいいのではないか。

ヴィクトリアは、ぐっと拳を握りしめた。

(いよしッ！ わたし、ヴィクトリア・コーザはただいまをもって、将来の目標設定を少々変更いたします！ 田舎に帰って小さな魔導具店を開き、ゆくゆくはいいひとのお嫁さんに、なんてことはもう言いません！ 目指すは、人気生活魔導具職人！ 皇都のお高い家賃もきっちり払えるくらいに、ガンガン稼げるようになります！)

魔導具の素体となる魔導石は、専門の業者から仕入れることができる。

今までの皇都で見て回った魔導具店では、性能とデザイン性にすぐれた魔導具であれば、割高なお値段設定でも飛ぶように売れていた。これからしつかり勉強とリサーチを重ねていけば、人

気生活魔導具職人になるというのは、さほど無謀な夢ではないはずだ。その上、ヴィクトリアには、伯爵家の跡取りであるリージェスの後ろ盾がついている。

そしていつか商売が軌道に乗った暁には、それまでお世話になったすべての人々に、できる限りの技術を詰めこんだ素敵な魔導具をプレゼントするのだ。

——受けた恩義は、倍にして返すべし。

亡き母の遺した、ありがたい教えのひとつである。

(ふっふっふ……。リージェスさま、このご恩は一生忘れませんからね！ 今後リージェスさまがどれほど複雑な魔導具をお望みになっても、ご期待にばっちり応えることのできるものを作れるようになってみせますとも！ もちろんんタダで！ ……いえ、できれば素体となる魔導石だけは、ご自分で作られたものを提供していただけるとありがたいです)

魔導石のことを考えると、己の魔力保有量の低さがつくづく恨めしい。魔力持ちの人間が石を持つていると、石が魔力を吸収して魔導石になる。しかし、魔力保有量の少ない人間が石に魔力を吸わせるには時間がかかるし、それほど純度の高いものも作れない。

ヴィクトリアが本当に皇族直系『シャーロット皇女殿下』の子どもなら、もうちょっとどうにかなっついていいのではないか。

もちろん、親の魔力保有量が高いからといって、子どもが同じだけの魔力保有量を持つて生まれるわけではない。それはわかっているけども、母の肩書きを考えると世の中の不条理に憤りたくなる。

しかし、今日は楽しい学祭だ。めんどろなことはひとまず忘れて、全力で楽しもう、と思ったと

きである。

ヴィクトリアは、ふとどこからか視線を感じ、振り返った。

何やら木の陰に身を隠すようにして、ひよっこりとこちらを見ていたのは――

(……熊さん?)

――シルクハットと赤い蝶ネクタイに燕尾服というキュートな衣装の熊が立っている。ふわふわもこもこの柔らかそうな毛並みを思わず撫でたくなるほど、実に愛くるしい熊の着ぐるみだった。その魅惑のふわもこボディに抱きついている子どもたちが、ちよつとうらやましい。

ただ、いくら見た目が可愛いふわもこの熊さんでも、体のサイズは立派なものだ。その中身は、九割以上の確率で、脳筋な『楽園』の生徒だろう。

ヴィクトリアは牛糞の可愛いものスキーではあるが、中身が可愛くないとわかりきっているものに対してまで萌えたりはしない。

彼女は慈愛をこめた眼差しで、熊に抱きついている子どもたちを見た。

(子どもたちよ……。そうです、もつと勢いよくタックルしなさい。よじ上りなさい。肩車をねだりなさい。そしてぶら下がりなさい。それが着ぐるみに対する正しいご挨拶です。ただし、あんまり景気よくどついたたり、蹴ったりしてはいけませんよ? ヴィジュアル的に、それはNGです)

熊にまどわりついて楽しげな歓声を上げる子どもたちに、ヴィクトリアは胸のうちでエールを送る。そして歩調を速めた。

まだ少し余裕はあるけれど、リージェスとの待ち合わせの時間が迫っている。

……別に、かつて『楽園』の寮で寝坊して遅刻したときに向けられたリージェスの冷やかな視線が、いまだにちよつぴりトラウマなわけではない。

時間は守りましょう、というヒトとして最低限のルールを遵守したいだけだ。

約束の時間より少し早めに待ち合わせ場所に着くと、リージェスはすでに来ていた。

品行方正な『楽園』の寮長さまらしく、学祭でも浮かれることなくきちんと制服を着たリージェ

スは――

(うーわー……)

――相変わらずの無表情であった。

半目になりつつ、反射的にわきわきと動きはじめた両手をぐつと握りしめる。そうして、彼の脇腹をくすぐりたい衝動をどうにか抑えこむ。

ひよつとして今日は、ずつとこの『完全無欠の寮長さまモード』な彼の顔を見ていなければならぬのだろうか。

それはいやだなあと思っていると、こちらに気づいたリージェスがわずかに目を見開いた。ヴィクトリアを見て何度か瞬きしたあと、心から嬉しそうに柔らかなほほえみを浮かべる。

ヴィクトリアは、よろめいた。

(リ……リージェスさま……!! 鉄壁の無表情からの不意打ち的な笑顔はヤバイです、反則です! 破壊力がすぎますので……!!)

あまりにも萌えすぎて、目の前にあるモーガンの背中をばしばしと叩きたい衝動に駆られたが、

ぐつと堪えた。

「よく来たな。……どうかしたか？ リア」

訝しげに眉を寄せたリージェスに、慌ててふるふると首を振る。

「な、なんでもありません。……あの、リージェスさまはお祭り用の扮装はなさらないのですか？」

「ああ。オレは、裏方担当だからな。今日はほとんどすることがないんだ。——モーガン、おまえも祭りをのぞいていくか？」

モーガンは、にこりとほほえんだ。

「いいえ。私は所用がございしますので、ここで失礼させていただきます。リアさま、のちほどお迎えに参ります。どうぞリージェスさまと一緒に楽しんでいらっしやいませ」

「はい！ ありがとうございます！」

モーガンは、ヴィクトリアとリージェスに一礼して元来た道に戻っていった。

（……お祭り！ お祭り！ おまけにリージェスさまが、寮長さまモードを解除してくださいました！ わたしは今、とつてもとつても嬉しいですよ！）

テンションがマックスに振り切れたヴィクトリアは、リージェスを見上げ、にばあと笑う。

「今日はありがとうございます、リージェスさま！ モーガンさまに付き添っていただけで、とても嬉しかったです。残念ながらミュリエルさまは来られないのでお土産を買って帰りたいのですが、何か喜んでいただけそうなものは売っているでしょうか？ できれば、可愛らしいお菓子があると嬉しいのですけど。よく考えてみたら、脳筋な男子生徒が作ったお菓子をミュリエルさまが召し上

がってくださいさるだろうかと心配になったりもしまして、でも笑いを取る方向だったらそれはそれでむしろアリなのではないかと——」

息をつく暇も惜しんで話していると、ぽん、と頭の上にリージェスの手が載った。

「とりあえず、少し落ち着け」

「……ハイ。すみません」

すー、はー、と深呼吸をする。

落ち着くと、自分のはしやぎっぷりに恥ずかしくなる。子どもっぽいにもほどがあった。

しよんぼりと肩を落としたヴィクトリアの頬に、長い指が軽く触れてくる。

おそるおそる顔を上げると、リージェスは穏やかにほほえんでいた。

「それにしても、随分見違えたな。モーガンの見立てか？」

「はい！ モーガンさまとメイドさんたちが、全部揃えてくれました！」

本日の『いいところのお嬢さま』な姿は、リージェスの有能な執事とメイドさんたちの努力の賜物だ。

どうぞどうぞ、思う存分褒めてくださってかまいませんよ！ と、ヴィクトリアはにこにこする。すると、笑みを深めたリージェスが少し体を屈めた。

（ええと……リージェスさま？ ち、近いのですよ？）

リージェスとしては、彼らの仕事ぶりをじっくりしっかり検分したいのかもしれない。

だが、この至近距離で彼の顔を見るのは、かなり心臓に悪い。どきどきと胸が騒ぎ、なんだかむ

ず痒いようないたたまれないような——それはくすぐったくも不思議な気分だ。

とはいえ、彼の麗しいお顔を間近でガン見できるチャンスはそうないだろう。そんな機会をみすみす逃すなんて、ヴィクトリアにとってありえない選択だ。

「あ、意外とまつげが長いんですね！ でもリージェスさまってば、男のひとなのにお肌がきれいすぎだと思えますよ？ 髪だつてさらさらのつやつやですし、どんなお手入れをなさっているのか、とっても気になってしまいます」

『楽園』にいたる間に銀髪を隠すため何度も染めたせいで、ヴィクトリアの髪はかなり傷んでしまった。ラング家で暮らしはじめ、とつてもお高そうな洗髪料やトリートメントを使わせてもらっているおかげで、だいぶ以前の艶を取り戻してはいる。それでもやつぱり、お年頃の女の子は常に、スキンケア・ヘアケアに関する情報を喉から手が出るほど欲しているのだ。

ヴィクトリアは、しばしの間じつくりとリージェスの肌や髪を観察した。

そして、一体どの製品を使っているのか尋ねようとしたとき——

「よく、似合っている。おまえのことはいつも可愛らしいと思っていたが、こんなにきれいになれると少し心配になるな。今日はオレのそばから、絶対に離れるんじゃないぞ」

「……ハイ」

——リージェスはどこか困ったように笑い、今まで聞いたこともないほど甘く優しい声で、直球ドまん中な褒め言葉を口にする。ヴィクトリアは、完全に思考停止した。

何度か瞬きをしているうちに、じわじわと頬に熱が集まってくる。やがて少しずつ活動を再開し

た頭の片すみで、ぼんやりと思う。

（こちらの方こそ、アナタの将来がとつても心配でございますよ、リージェスさま……）

イケメンは、自分の笑顔と声の持つ攻撃力を、きちんと把握・制御しておくべきではないだろうか。自分を含め、周囲にいる乙女たちの心臓のために。

そんなヴィクトリアの気持ちは露知らず、リージェスはまるで何事もなかったかのような顔で、さらりと話を変えた。

「じゃあ、まずはおまえの友人たちのところへ行くか。——軽食を扱っているらしいが、今食べられるか？ あとにした方がいいなら、おまえの喜びそうなイベントをやっているところへ先に案内する」

「え、あの、はい——じゃなくて、いいえ！ 先にランディたちのところへ行きたいです！」
ヴィクトリアは、慌てて言った。

ちよつぱり、彼らの顔を見てほつとしたくなったのである。

ランディも見た目は一応、爽やか系のイケメンだ。しかし、彼とは可愛いものスキー仲間。同志であるとかわかってはいるためか、ヴィクトリアは今まで一度も彼の笑顔に萌えたことはない。

以前、彼がラブリーな仔猫型の魔導具に、めろめろにとろけた笑顔を向けていたことを思い出す。ヴィクトリアは、なんだかとても落ち着いた。癒やし系の友人の存在は、実にありがたい。

いつかランディにも白い仔猫を——いや、それではミュリエルへのプレゼントとかぶりすぎだろうか。

彼は、これからどんな過酷なカリキュラムをこなしていかなければならない『樂園』の生徒なのだ。むしろ、本人に魔導石を提供してもらって、これからの学生生活に役立ちそうな魔導具を作ったあげた方が喜んでもらえるかもしれない。

そんなことを考えて現実逃避をしながら、ヴィクトリアはこつそりと深呼吸を繰り返す。——夏の休暇のときと同様、今回だって、リージェスには絶対に『詐欺だ』という、若干微妙でわかりにくい褒め方をしてもらえると思っていたのだ。

なのによさか、こんな夕日に向かって走り出したくなるような気分させられてしまうとは、想定外にもほどがある。

ヴィクトリアは、ちよつぱりその衝動に身を任せなくなった。

だが残念ながら、本日ヴィクトリアが履いているのは少し踵の高いお洒落な靴。全力ダツシユに適したものではない。

ヴィクトリアは、ふつとアンニュイなため息をついた。

「リア？ どうかしたか？」

それに気づいたリージェスが、氣遣わしげに顔をのぞきこんでくる。

「なな、なんでもありませんッ！」

迂闊にため息ひとつつけない。ヴィクトリアは、この現状になんか泣きたくなってきた。

（うう……っ、助けてランディ！ わたしは今、アナタの癒やし系笑顔がとっても欲しいのです！……！）

自分の寿命のためにも、一刻も早く友人のもとへ辿り着くしかない。

動揺をごまかすためにへらつと笑ったヴィクトリアは、さかさかと早足になったのだが——

「ひゃっ」

「……大丈夫か？」

——慣れない靴のせいで、石畳の段差につまずいてしまった。『樂園』の授業で反射神経を鍛え上げられたリージェスは、ヴィクトリアがすつ転ぶ前にきちんと抱き留めてくれる。

だがそのおかげで、先ほどからおかしな具合に跳ね回っていたヴィクトリアの心臓は、いつそう深刻なダメージを受けた。

（わー……。いい匂いですねー、リージェスさま。一体どちらの石けんをお使いなのでしょうか。

ああでも多分、この匂いはリージェスさまがお使いになっているからそのもの。ほかの人が使っても、きつとこんな素敵な匂いにはならないのでしょうか。だったらここはやっぱり、思う存分心ゆくまで堪能しておくべきなのでしょうっかッ）

なんだか思考が変態くさくなってきた。

こんなことを考えているのがバレたら、リージェスにどん引きされてしまうだろう。

——それは、いやだ。

せつかく、こんなに優しくしてもらえるようになったのだ。また以前みたいな絶対零度の眼差しで見られたら、完全に再起不能である。

そんな恐ろしい未来をあまりにリアルに想像してしまい、ヴィクトリアは瞬時に蒼白になった。

涙目で顔を上げる。

「だ……大丈夫、です。ごめん、なさい」

もう二度と、素敵な匂いに変態っぽくうつとりしたりいたしません。すみませんごめんなさい許してください、と祈っていると、なぜかリージェスがおかしな具合に固まる。

「リージェスさま？ どうかなさいましたか？」

「……いや、なんでもない」

そのとき一瞬、視線が外された。ヴィクトリアは、『いやああああー！ もしやすでに変態認定されてしまいましたか!? ほんの出来心だったんです、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいー！』と背筋の凍る思いをする。

だが、すぐにこちらを見た藍色の瞳は、いつもと同じ優しく穏やかなものだった。

「そんなに慌てなくても、おまえの友人たちは逃げたりしないだろう？ 慣れない格好をしているんだから、気をつけて歩くんだぞ」

「は、はい」

石畳の上で転んだら、せつかくきれいに着付けてもらった服が汚れてしまう。うつかり忘れていたけれど、自分が身につけているものはすべてお貴族さま仕様の高級品。もし汚したり傷つけたときには、手入れに大変な手間と時間が必要になるだろう。

自分の粗忽さを心から反省したヴィクトリアは、慎重にゆっくりと歩きはじめた。

——目的地に近づき、そこで働くランディたちの姿を見て半目になる。

（ランディ……。わたしは今、アナタに笑って声をかけるべきなのか、それとも黙って何も見なかったことにして引き返すべきなのか、葛藤しております）

隣でリージェスが、ぼつりとつぶやく。

「なんというか……。どこからツッコめばいいのか、迷うところだな」

売っている物は、串焼きをはじめとした庶民の味的な軽食。だから、祭りでテンションが上がった彼らが、上半身裸にエプロンというワイルドな格好であることはさしたる問題ではないだろう。

しかしそんな男くさい姿の青少年たちが、みんな揃って可愛らしいネコ耳の力チューシャを装備しているのは、いかがなものか。

（ぼつちりそれぞれの髪色に合わせてネコ耳が作られているという芸の細かさ。それがまた微妙に脱力感を増してくれるのですよ……）

どうやらランディのネコ耳萌えは、クラスメイト全員を巻きこんでしまうほどになっていたらしい。

自分がその原因だという自覚が充分にあるので、ヴィクトリアはとつても申し訳なくなる。

とはいえ、祭りに招いてくれたランディに、挨拶もせず帰るわけにはいかない。

意を決して近づくと、こちらに気づいたランディが大きく目を見開いた。それから、とても嬉しそうな笑みを浮かべ、ぐっと親指を立てる。

ヴィクトリアはそのとき、心の中で親指を立て返しながら、上半身裸のエプロン少年がネコ耳力チューシャをつけているというのもアリかもしれないな、と思った。

「こんにちは、ランディ。お元気でしたか？」

ヴィクトリアは『いいところのお嬢さま』っぽく、にこりと笑う。

ランディもヴィクトリアに合わせ、一瞬浮かべた不敵な笑みをすぐに消して、やけに優雅な仕草で一礼する。ネコ耳裸エプロンなのに。

「まさか、本当にいらしてくださるとは思いませんでした」

「お誘いありがとうございます。——その格好、寒くはないのですか？」

素朴な疑問を向けると、ランディはひよいと肩をすくめる。

「こちらで火を扱っていますから、少し暑いくらいですよ。お嬢さまのお口に合うかどうかかわかりませんが、よろしかったら召し上がっていきませんか？」

ヴィクトリアがにっこり笑ってお願いしますと言おうとしたとき、リージェスが口を開いた。

「悪いが、肉を串から外してもらえるか。そのままだと、彼女には少し食べづらい」

「あ、はい。わかりました。でしたら、紙皿に新しい串を添えてお出ししますね」

（リージェスさま……。確かに、いいところのお嬢さまは、大口を開けて串焼きにかぶりついたりいたしませんね！ ナイスフォローをありがとうございます！）

ヴィクトリアは、リージェスの気遣いにじーん、と感動した。

(……ん?)

そのとき、ランディ以外のクラスメイトたちが屋台の奥の方にひっこんでいることに気づく。

あんまり近くに寄ってこられて、自分がヴィクトリア・コーザだと彼らにバレては困る。

しかし、ネコ耳裸エプロン姿の青少年たちが一カ所にみちっと集まっている姿は、あんまり美しいものではない。ヴィクトリアは若干引きながら、こっそりとランディに尋ねた。

「あの……ランディ？ みんなは、なぜ奥にひっこんでいるのですか？」

ランディは、くつくつと笑って声を低める。

「ヴィッキー？ 男の子ってのはなー、可愛い女の子の前ではカッコつけたくなっちゃうイキモノだったりするですよ。今のヤツらは、恥ずかしさでびる震えている仔猫ちゃんなのです」

「……それがわかっていて恥ずかしい格好をさせるとは、ランディもイイ性格をしていますね」

ヴィクトリアは、少しあきれた。無理やりこんな格好をさせて彼らの士気を下げてしまつては、営業に差し障るのではないだろうか。

しかし、ランディはヴィクトリアの言葉を意にも介さず、にやりと笑った。そして屋台の奥から箱を取り出して、ヴィクトリアの目の前にかざしてみせる。

「これも、うちの商品なんだけどな。おまえにはタダでやるよ。昔のよしみつつーか、退学になつてなかったら、おまえも店に出てこれをつけてたんだしさ」

それは、ふわふわとした銀色のネコ耳がついたカチューシャだった。屋台のあちこちにカチューシャが飾られているのには気づいていたが、まさかこれも売り物だったとは。

たとえ生徒として店に出ているとしても、ネコ耳裸エプロン姿になることだけは断固拒否していただろう。けれど、こうして祭りの間だけでも彼らと何かを共有できるのは、やっぱり嬉しい。可愛らしい銀色のネコ耳カチューシャを受け取り、さっそく頭に装着してみる。



「……おかしくありませんか？」

ヴィクトリアが聞くと、ランディは両手を叩いて満面の笑みを浮かべた。

「おお、似合う似合う！ やっぱ、うちの連中よりずっといいな！」

比較対象が裸エプロンの筋肉系男子である以上、その評価は微妙だなーと思う。

しかし、褒め言葉は褒め言葉。ヴィクトリアは、にっこり笑って礼を言った。

「ありがとうございます、ランディ。ええと、串焼きはおいくらですか？」

ランディがあきれた様子で顔をしかめる。

「ばーか、男に恥をかかせるようなこと言ってるじゃねーよ。——リージェスさま、お代を頂戴ちやうだいしてもよろしいですか？」

「ああ。いくらだ？」

リージェスは無表情で答えた。ランディが近くに飾ってあった黒のネコ耳カチューシャを手に取る。

「もしよければ、リージェスさまもお揃いで——」

「結構だ」

リージェスは即答したが、ランディはめげなかった。

「絶対、喜びますよ？ コイツ」

「……結構だと、言っている」

リージェスはランディにお金を渡して皿を受け取り、歩き出した。ヴィクトリアは改めてランデ

イに札を言うど、リージェスを追いかける。

「リージェスさま？ ああ、ありがとうございます」

リージェスが少し疲れたような顔で、いや、とつぶやく。

「おまえの友人は、なかなか面白い男だな」

「はい。元々可愛いものが大好きなひとではあったのですけど……。まさか、リージェスさまにまでネコ耳をすすめるとは思いませんでした」

ヴィクトリアの言葉を聞き、リージェスが半目になって振り返った。

「あれは、オレをからかって遊んでいただけだ。決して本気であの頭飾りをすすめてきたわけではないと思うぞ」

そうなのかな、とヴィクトリアは首をかしげる。

「リージェスさまをからかって遊ぶなんて、ランディは随分いい度胸をしているのですね」

それほどの度胸があるランディなら、リージェスの友人になれるかもしれない。

ヴィクトリアは、ランディに心からのエールを送った。

（がんばって、リージェスさまの友人になってくださいね、ランディ！ リージェスさまにはちよつぱり変わった崇拜者は大勢いらっしやいますけれど、マトモにご友人と呼べるのはシャノンさまおひとりだけかもしれません。あなたがリージェスさまとお友達になってくれたら、わたしはとっても嬉しいです！）

ほっこりした気分で食べた串焼きの肉は、とてもおいしかった。

そのあと、ヴィクトリアはリージェスとともに上級クラスのイベント会場を訪れた。そこにいたシャノンが、彼女の姿を見るなりあきれ顔で言う。

「……なんか、すんげーやな気分になった」

「顔を見るなりそのお言葉は、さすがにひどくありませんかー!?」

ヴィクトリアは思いきりむくれた。

シャノンは、顔をしかめたヴィクトリアの両頬を、むにとつまむ。

「中身がコレだとわかっていると、そのあざとい外見がひじょーにムカつくのだ。なんだそのネコ耳は。あんまり狙いすぎると、あざといを通り越して笑いを誘うぞ？」

友人からもらった大切なネコ耳を貶され、ヴィクトリアは非常にムカついた。シャノンの足の甲を、靴の踵かかとで思いきり踏みこむ。

「……っ！」

うずくまって悶絶するシャノンを、ヴィクトリアはふふんと笑って見下ろした。

こちらら曲がりなりに半年以上、近接戦闘訓練だらけの『楽園』で過ごしたのだ。それを知っているくせに喧嘩を売ってくるとは、まったく思慮しりょが浅いにもほどがある。

「……シャノン」

そのとき、やけに低く冷たいリージェスの声が響いた。シャノンがぎよっとした様子で勢いよく顔を上げる。

「気安く、触るな」

「……ハイ。スママセンデシタ」

ヴィクトリアは、ちよつと引いた。

（リージェスさま？ あの、そんなに怒っていたかなくても大丈夫ですよ？ しよつちゅう頭を鷲掴みにされたりしてきたのですから、ほつぺを引つ張られるくらい、ほんとになんてことないのですよ……？）

びくびくしながらふたりの様子をうかがうと、リージェスがヴィクトリアを見てにこりと笑った。

「次からは急所を狙え。婦女子の顔を痛めつける阿呆には、手加減してやる必要はないんだぞ？」

「は、はい！ わかりました！」

思わず敬礼しそうになったヴィクトリアの足下で、蒼白になったシャノンがぎゃあどわめく。

「もうしねえって！ だーもう、悪かった、オレが悪かった！」

慌ただしく立ち上がると、シャノンはさりげなくヴィクトリアから距離を取った。

いまさ、彼の急所を狙うつもりはないのだが。

（そういえば母さんが、変な男のひとに絡まれたときには、真下から体にめりこませる勢いで蹴り上げるって言ってたっけ。『楽園』では急所への攻撃を禁止されたから、すっかり忘れてたな！）

「……おい、おまえ。今何か、とても恐ろしいことを考えていなかったか？」

「え？ いえ、別に」

振り返ると、シャノンが何やらひどく青ざめている。

一体どうしたんだらう、と思っていたら、リージェスが小さく息をついた。

「シャノン……。おまえは変なところで勘がいいな」

「やかましいわ！」

シャノンが再びぎゃあ、とわめく。

改めて見てみると、彼は一風変わった異国風の衣装を着ていた。

上着は、ゆつたりとしたつくりの前合わせのもの。その肩口と腰を、色鮮やかな紐と帯で締めている。光沢のある深い青緑色の生地には、伝説上の生物が華やかに描かれていて実に麗しい。

黙って立っていれば、まるで異国の勇壮な王子さまのようだ。

ヴィクトリアはなるほど、とうなずいた。

（うん。『黙ってさえいれば』それなりに見えるってところが、わたしとシャノンさまの共通項なのですね。なんだか微妙な気分ではありますが、ほんのちよびつとだけ、親近感がわきますよ。シャノンさま）

シャノンが、半目になってこちらを見る。

「……なんだか、失礼なことを考えていなかったか？」

「イエ、別に」

やっぱりシャノンは、かなり勘がいいのかもしれない。

彼のクラスが行っているイベントは、正門前広場の奥に造られた巨大な人工池での不思議な水遊びだ。人工池は三段あり、段ごとに角度の違う幅広の滝が流れている。

シャノンたちが使っているのは、最上段の人工池だ。

滝の少し手前に、普段はない頑丈そうなフェンスが設置されていた。その両側に置かれた高い椅子には、監視員らしき腕章をつけた生徒たちが座っている。

池の上には、大きくて透明な球体が浮かんでいる。それは、防御シールドの構築式を応用した魔導具だという。

幼い子どもたちは親と一緒に、少年少女たちはひとりずつその中に入って遊んでいた。

彼らは大きな歓声を上げながら、ボールの中で楽しげにぐるぐると転げまわっている。そのボールの内部は、かなり弾力性に富んでいるようだった。

また上手く扱えば、ボールを回転させて、なかなかのスピードで移動することもできるらしい。奥の競争用レーンでは、少年たちが真剣な顔をして競い合っている。

とっても楽しそうではあるけれど、残念ながら本日のヴィクトリアは、こんなアクティビティにはとことん不向きなお嬢さま仕様。

いいなー、いいなー、とうらやましく思いながら見つめていると、シャノンが笑って口を開いた。「あっちのボールタイプはさすがにムリだが、なんだったらボートタイプに乗ってくか？ 船底の素材が透明になっているから、水の中が見えて結構面白いぞ」

彼の言葉に、ヴィクトリアはきらきらと瞳を輝かせておねだりポーズをしようとした。それを察してか、リージェスがシャノンから素敵なボートを借りてくれる。

なんだか最近、リージェスにこちらの行動パターンを読まれまくっている気がする。

ヴィクトリアは、ボールタイプの遊具で人々が遊んでいるところから少し離れたボート乗り場まで行き、ボートに乗せてもらった。オールを漕ぐのはリージェスだ。

(……おおおおー！ すごいです！ ここでこんなにたくさん、お魚を飼っていたなんて！)

シャノンが言っていた通り、普段は見ることでできない水の中が見えた。その美しさに心が躍る。「……ん？」

ふと、リージェスが何かに気づいたようにボールエリアの方を見た。

どうしたんだろうと思ひ、ヴィクトリアは彼の視線の先を追う。

すると、水上に浮かぶボールの中に、やけに大きなずんぐりむっくりとしたものの姿がある。

(……熊さん？)

よく見ると、それは校門近くで目にしたキュートな熊の着ぐるみだった。

どうやらあれは、このクラスの客引きだったようだ。

熊の入っているボールは、ほかのたくさんさんのボールに取り囲まれていた。四方八方から突撃してくるボールに翻弄されて、飛んだり跳ねたり沈みかけたりと、もみくちゃにされている。

リージェスが目を細めて、しみじみと言った。

「熊も大変だな」

「そうですねー。……あ」

そのとき、やけに元気のいい少年たちの入ったボール三体に同時突撃され、熊入りボールが大きくはじき飛ばされた。かなり高めに設置された安全フェンスを、軽々と飛び越えていく。

……もし飛ばされたのが子ども入りのボールだったなら、監視係の生徒たちは、どんな手段を使ってもそれを確保していただろう。

だが、彼らはただポカンとそれを見ていた。ふわもこのお洒落な熊さん入りのボールが空中を高々と飛んでいく姿は、ちよつぴりメルヘンチックだ。そのせいで監視係の咄嗟の判断が鈍ったのかもしれない。

リージェスは、熊入りボールが飛んでいった中段の人工池の方に一瞬目を向け、すぐに逸らして言った。

「……生きてるといいな」

「……そうですねー」

何事もなかったかのように、ヴィクトリアはリージェスとともにボートから下りた。そしてふとリージェスのクラスのイベントを見てみたくなる。

何しろ彼らは、この『楽園』ヒエラルキーの最上位に君臨しているのである。さぞ気合いの入った素敵なイベントを催しているに違いない。

ヴィクトリアがそう言うと、リージェスはなぜか困った顔をした。

「また、見るだけになるぞ？」

「えっと……何をなさっているんですか？」

「滑り台だ」

ヴィクトリアは首をかしげた。『楽園』最上位クラスの催しが、子ども向けの遊具とはいかに。

そんな疑問が伝わったのか、リージェスが苦笑まじりに言う。

「簡易要塞設営ブロックとエアクッション、それに高所脱出用エアシューターの術式を組み合わせで作ったんだが、少々スリリングなものになってしまつてな。——一応、見るだけ見てみるか？」

「……ハイ」

話を聞くだけで背筋が凍ったが、怖いもの見たさというやつである。

——それは、校舎の裏側に広がる、訓練用のグラウンドにあった。

その滑り台を見た瞬間、ヴィクトリアは思った。

これは絶対に、『少々スリリング』などという可愛らしいレベルじゃないだろう、と。

摩擦熱で火傷をしないようにという配慮からなのだろうか。滑り台にトライする人々には、一抱えほどの大きさのソリのようなものが手渡されている。

彼らは非常に緊張した面持ちで、かなり斜度のある階段を延々と上ったあとに、滑り台に突入していく。高さは『楽園』の校舎四階分くらいはゆうにある。

そして何より上げつないところは、滑走部分が、先ほど人工池で見たボール型の遊具と同じ透明素材でできている、という点だ。

基本的に怖いのが大嫌いなヴィクトリアは、あんなものに自らトライしようとするなんて、みなさんちよつぴり危ない被虐嗜好があるのではないかと思つてしまう。

ヴィクトリアは、おそろおそろリージェスを見上げた。

「あの……。リージェスさま？」

「『楽園』での最後の祭りだから、クラスの連中が妙に張り切ってしまったな。あれでも一応、安全確保を万全にするために、いろいろなことをかなり控えめにさせたんだ。……こっちの隙を見て余計な術式を付加しようとする連中の頭を、何度どつき倒したとか」

そう言うリージェスの目が据わっている。テンションが上がりがきってしまったっている級友たちを制御するのは、完全無欠な寮長さまでも難しかったのかもしれない。

こんな絶叫アクティビティ、とてもヴィクトリアは楽しめない。見ているだけで背筋がぞわぞわしてしまふ——と思っていたら、「ひいひいひいひい」という大声が滑り台の方から聞こえてきた。滑走部分は筒状なのに、どうしてこんなに中の声が聞こえてくるのだろう。

疑問に思っていると、リージェスがぼそつとつぶやいた。

「あれの魔術式を組んだ連中が、臨場感を出すためには絶対に必要だと言いつつ張って譲らなくてな。

中の音声を、この会場内に聞こえるくらいに増幅して流しているんだ。オレは悪趣味だからやめておけと言ったんだが——」

彼の言葉が終わる前に、今度は「いやっほおおおおー!!」と叫ぶ声が聞こえた。……どうやら、滑り台を全力で楽しむがゆえの歓喜の雄叫びのようだ。

「——世の中には、いろいろな人間がいるのだな」

そう言ったリージェスの横顔は、どこか憂いを帯びていて実に麗しかったのだが、あんまり萌えることはできなかつた。

いずれにせよ、ここはチキンハートなヴィクトリアがいていい場所ではない。

ああいった恐ろしいモノを楽しむためには、きつと戦術級防衛シールド並の強度を持つ心臓を所有していなければならぬのだ。ヴィクトリアはごく普通の人間である。そんな超人的な強靱さを備えた人々とは違う世界で生きているのだから、ここは潔く戦略的撤退を選択すべきだ。

己の進むべき道を悟ったヴィクトリアは、にっこり笑ってリージェスを見上げた。

「リージェスさま。正門前広場の方に戻りませんか？ ミュリエルさまのお土産を選びたいです」
来るときは、一刻も早くランデイのところへ行くために、ほかの屋台はすべてスルーしてきた。

それらの中には、とても脳筋系男子学生の作品とは思えないほど可愛らしい商品を並べている店がいくつもあつた。

作者の学生は、人気魔導具職人を目指すヴィクトリアのライバルになるのかもしれないのだ。彼らの実力は、今のうちにせひこの目で直接確かめておきたい。

ヴィクトリアが踵を返したそのとき、背後から高く澄んだ声が聞こえてきて、びしつと固まった。「——アイザック！ ぼくはこれに乗りたいと言っているだろう！ なぜ邪魔をする!？」

「ベルナルドさま。お言葉ですが、邪魔をしているのは私ではございません。この『ごめんね！ボクよりも小さなお子さまは、滑り台に乗ることはできないんだ！』と訴えている、ぶたさんなのです。あなたさまがぶたさんよりも小さなお子さまである以上、滑り台に乗ることはできないのです」

抑揚のない訥々とした声で、誰かが滑り台の身長制限を体现しているキュートなぶたさんの台詞

をさざりと言つてのける。

ヴィクトリアは、おそるおそる肩越しに背後を振り返った。

(……っやっぱりっ!!)

そこには、愛くるしいぶたさんのぬいぐるみを眺みつけ、懸命に背伸びをする小柄な少年の姿があった。目立つ金髪を帽子で隠して、ごく一般的な貴族の子弟のような格好をしている。

しかし彼は紛れもなく、この国の皇太子——ベルナルド・ティルティス・レンブラント・ネイ・ギネヴィア殿下だった。

母の素性がヨシユアの言う通り現皇帝陛下の姉であった場合、この少年はヴィクトリアの従弟にあたる。

反射的にリージェスの体を盾にして、彼らから隠れながら、ヴィクトリアは思った。あんな恐ろしいな滑り台に乗りたがる子どもと自分が血縁関係にあるなんて、絶対に何かの間違いだ——と。

「リ、リア？ いきなり、どうした？」

盾にされたリージェスの動揺した声は、ヴィクトリアには聞こえていなかった。

(いや、だって、ヨシユアさまの話では、わたしの顔がシャーロット皇女殿下に似てるってー!)

シャーロット皇女殿下は国民の前に出る機会が少なく、彼女を見たことのある民は少ないと聞くしかも、彼女が行方不明になったのは二十年前。シャーロット皇女殿下とよく顔を合わせていた有力貴族や臣下を除き、皇都民で彼女の姿を覚えている者は稀である。

また、ヴィクトリアの髪色は、シャーロット皇女殿下の金髪とはイメージのかけ離れた銀髪だ。

そのため、ヴィクトリアの顔を見た一般の国民で、シャーロット皇女殿下とのつながりを察する者はいないだろうとヨシユアは言っていた。

しかし皇城に、歴代皇帝一家の肖像画が一枚もないはずがない。自分と似た顔をしていたという『シャーロット皇女殿下』の若い頃の肖像画だってあるだろう。

そしてあの子どもは、皇室のお坊ちゃま。それらの肖像画を目にする機会など、今までにいくらかもあつたはずだ。

おまけに今のヴィクトリアは、男の子の格好ではない。モーガンたちの素晴らしい努力によって、ぴっぴかのお嬢さま仕様。……ネコ耳付きではあるものの。

(ま、まずい気がします。今のわたしがあのお坊ちゃまに見つかるのは、なんだかとてもまずい気がするのですよ……っ)

お嬢様姿のヴィクトリアを見たら、いくら髪色が違うといえど、顔が似ていると気がついてしまつかもしれない。

いやな汗がヴィクトリアの背筋を滑り落ちていく。彼女は、盾にしているリージェスの制服をぎゅっと握りしめた。震えながら、どうにか口を開く。

「リ……リージェス、さま。リージェスさまの後ろの方に、皇太子殿下とお付きの方が……」

「……なんだと？」

途端にリージェスの声が、寮長モードの低く淡々としたもの変わった。その声を聞くといつもは寂しくなるのに、今は気持ちを落ち着かせてくれる。

ヴィクトリアは泣きそうになりつつリーゼスを見上げた。

「あの、ええと、わたしの顔を殿下に見られるのは、とってもまずいと思うのですけれど……っ」
何がまずいのかは、自分でもよくわからない。けれど、とてもまずいことだけは確かだ。

勘、だとか——本能、だとか。そういったものが『もしあの子どもにも母の素性がバレてしまっ
たら、とってもめんどうなことになっちゃうゾ！ 全力で回避セヨ！』と叫んでいる。

その警鐘があまりにも大きすぎて、自分が今、何をどうしたらいいのかまるで考えられない。
パニックを起こしかけたヴィクトリアの背中を、リーゼスがとんとんと優しく叩く。

「落ち着け。あの方は、まだ八歳だぞ？ お忍びでいらした祭りで遊びに夢中になっていたら、周
囲の人間の顔に注意を払う余裕なんてないだろう。——大丈夫……大丈夫だ」

落ち着いた低い声で大丈夫だと囁かれているうちに、少しずつ平静を取り戻していく。

深呼吸できる余裕が生まれて、強張っていた指先から力が抜けてくる。

「落ち着いたか？」

「……はい」

うなずくと、リーゼスの長い指がそっとヴィクトリアの前髪を払う。彼はヴィクトリアの顔色
を確かめ、軽く目を細める。

「少し、待っている」

リーゼスはポケットから携帯通信魔導具を取り出し、誰かを呼び出した。そして淡々と相手に
告げる。

「オレだ。会場に身長制限未満の子どもが増えてきている。カーニバルモードに移行しろ」

リーゼスが通信を切るとすぐに、周囲でわあっと歓声が上がる。

それにつられて、ヴィクトリアは視線を動かす。——風景が、一変していた。

あたり一面に色とりどりの花が舞い、美しい羽の小鳥たちが飛んでいる。きらめく光のシャワー、
そこかしこに架かる小さな虹。

——まるで突然、おとぎの国に迷いこんだかのよう。

それが、巨大な滑り台の最上部から会場全体に映し出されている幻影だと気がつくには、少し時
間が必要だった。

楽しいに踊る動物や、ぼんぼんとあちこちに飛び跳ねるぬいぐるみやおもちゃ。子どもたちは明
るい笑い声を上げて、それらを追いかけていく。

「子どもたちに、乗り物に乗れずに悔しい思いをさせるだけというのは、申し訳ないからな。これ
なら殿下も、まずおまえに気がつくようなことは——」

「ベルナルドさまああああー！ それはここの者たちがひとびとを楽しませるために制御してい
るぬいぐるみであって、訓練用の自律稼働型ターゲットではございません！ だめです！ いけま
せん！ それを破壊してはなりませんー!!」

——ヴィクトリアとリーゼスは、黙ってその場をあとにした。

連続して聞こえてくる破壊音とお付きの青年の悲痛な声には、気がつかなかったことにして。

それからヴィクトリアはリージェスの案内で、『楽園』内でも技術開発方面に秀でた生徒たちが開いている小型魔導具店を、あちこち見て回った。

実用的な生活魔導具を扱っている店はなかったけれど、興味を惹かれる小型魔導具がたくさんあった。

四季折々の色彩の変化を忠実に再現している樹木の置物や、複雑な機構を持つおもちゃ、精巧な仕掛けを施したびつくり箱など、かなり高度な技術が必要と思われるものばかりだ。

在学中は、ほかの生徒たちの技術に意識を向ける余裕はまるでなかった。

しかし、改めてじっくりと見てみると、彼らの技術力には本当に驚かされる。

繁華街の立派な店舗で売られている魔導具と比べても、性能もデザイン性も引けを取らない。

いくら脳筋育成機関である『楽園』で殺伐とした生活を送っていても、彼らは基本、貴族階級のお坊ちゃま。芸術的な素養が、一般人よりも遙かに身につけているのかもしれない。

おまけに、それらの魔導具の価格は市販のものよりもずっと安い。目の前で、個性的な魔導具が次々に売れていく。

客たちと楽しみに言葉を交わしている生徒たちは本当に生き生きとされていて、ヴィクトリアは彼らがとつてもうらやましくなった。

(もし男の子に生まれていたら、わたしだって今も楽しく『楽園』生活を——いや、でもネコ耳裸エプロンはイヤだな)

一瞬、自分が女に生まれたことを恨めしく思ったヴィクトリアだったが、先ほど見たランディたちの恥ずかしい格好を思い出し、復活しかけた『楽園』生活への未練を即座に断ち切った。

人間には、二種類いる。

その場のノリに最後まで全力で乗つかれる人間と、途中でうっかり我に返ってしまう人間。

ヴィクトリアは、間違いなく後者だった。

「……リア？　それが気に入ったのか？」

「え？　あ、はい、そ……ういうわけではないみたいですーっ！」

物思いに耽つていたヴィクトリアの目の前には、実物大のタランチュラを模した動くおもちゃがあった。ヴィクトリアは女の子なので、蜘蛛の類は大嫌いなのだ。どんな小さなものでも、目にした瞬間に殺意がわいてしまう。

ふるふる震えていると、リージェスがひよいと手を伸ばし、それをヴィクトリアの前から遠ざけてくれる。

「あ……ありがとうございます。リージェスさま」

もし殺意のままに商品を叩き潰したりしていたら、弁償しなければならなかったところだ。ほっとしてリージェスを見上げると、彼は小さく苦笑した。

「何か、考えごとでもしていたのか？」

凶星を指されて、ヴィクトリアはへによりと眉を下げる。一瞬、ごまかそうかとも思ったけれど、自分にこんなによくしてくれるリージェスに、いい加減なことは言いたくない。

「その、わたしが男の子に生まれていたら、今でも『楽園』にいられたかなー、なんて思っています」

できるだけ軽く聞こえるようお願いつつ、へらつと笑いながら言うと、リージェスが黙った。もしかして、未練がましいやつだと思われたのだろうか。

「ばかなことを言ったと後悔してうつむくと、リージェスが静かに口を開いた。
「それは、困るな」

「……困ります、か？」

思いがけない言葉に困惑して、顔を上げる。彼は、ふつとほほえんだ。

「ああ。……オレは、今のおまえがいい」

不意打ちの笑顔と甘ったるい声の複合攻撃を食らったヴィクトリアは、今手の中に商品を持っていないくてよかった、と思った。もし何か持っていたら、間違いなく握り潰していた。

「そ、そう、デスカ」

頬がじわじわと熱くなるのを感じながらどうにか言うと、リージェスは真顔でうなずいた。

「いくら可愛らしい外見をしていても、男に優しくして喜ぶような趣味はオレにはないからな」

さらりと言われて、ヴィクトリアはぎよっとした。

そういえば、リージェスと親しくなったきっかけは、夏の休暇前に女だとバレたことだ。もし自

分が男だったなら、メイア家の別荘への招待もなかっただろう。こうして今のように親しく言葉を交わすなんて、きつと夢のまた夢だったに違いない。

（お、女の子でよかったね、わたし！ それに、リージェスさまが、女性に親切なジェントルマンでよかったねー！）

ヴィクトリアが内心胸を撫で下ろしていると、リージェスが苦笑しながら言った。

「リア？ 連れてきておいてなんだが……。この商品は、ミュリエルがあまり喜ばないかもしれないな」

確かに、この店にあるのはヴィクトリアの身長ほどもある樹木の置物や、『楽園』の授業で使用されているのと同じモデルの遠距離攻撃魔導具型を模した超強力水鉄砲。蓋を開けたら、中からはつくりと口を開けて「イイイヤッフウウウー！」と叫びながら人間の実寸大頭蓋骨模型が飛び出してくるびっくり箱、といったものばかり。この中のどれを贈っても、ふんわりとほほえむ天使のような少女に喜んでもらえるとは思えない。

ふたりは結局、手ぶらでその店を出た。

それからいくつもの店を回って、ようやく納得できるものを見つける。

（ふ……っ、わたしは今後もう二度と、『楽園』の生徒たちを十把一絡げに脳筋呼びわたりしたりはいたしません。コレを作った生徒さんは今からでも遅くないので、人生の選択を考え直した方がいいんじゃないかと思えます）

——とつても望み通りのお土産を見つけることができたのに、ヴィクトリアが若干やさぐれてい